

無線技術の日本史 上巻(本文)目次

まえがき

第一章 「咸臨丸」で知られる木村攝津守と

その次男・木村駿吉

——文政十三年～明治十七年——

……………
13

- 一・一 「咸臨丸」をひきいた木村攝津守の生涯 14
- 一・二 少年時代の木村駿吉 20
- 一・三 東大予備門に入学・退学・復学 23

第二章 不敬事件とアメリカ留学

日本人として二人目の数学による外国博士

——明治十七年～明治二十九年——

……………
29

二・一	齋藤姓で多筆家ぶりを發揮しはじめた大学時代	30
二・二	人生航路波乱のはじまり 第一高等中学教員の時代	35
二・三	不退転の決意でアメリカへ	43

第三章

無線技術の前史をたどる

——明治十九年〜明治二十七年——

……………55

三・一	電波を用いない無線電信	56
三・二	電気振動の発見と電波の予言	63
三・三	電波放射の発見と受信素子コヒーラの發明	70

第四章

マルコーニの成功と松代松之助の登場

——明治二十八年〜明治三十年——

……………83

四・一	イタリアに生まれイギリスで成功したマルコーニ	84
四・二	イギリスに渡ったマルコーニの名声高まる	88
四・三	技術の天才 松代松之助の登場	102

四・四 火花式送信機の電波形状とアンテナの性質 111

第五章 秋山真之の達識と海軍無線の胎動

——明治二十九年〜明治三十三年——
.....
123

- 五・一 木村駿吉、二高教授から海軍へ 124
- 五・二 小田切延壽と秋山真之の提言および対清韓折衝の顛末 128
- 五・三 無電委員会を主導した外波内藏吉の登場と木村駿吉の移籍 144
- 五・四 マルコーニの特許問題 161

第六章 無線電信調査委員会と「三四式無線電信機」

——明治三十三年〜明治三十四年——
.....
173

- 六・一 無線電信調査委員会の発足 174
- 六・二 無電機主要部品の解説 1——送信機用部品—— 195
- 六・三 無電機主要部品の解説 2——アンテナと受信機用部品—— 223
- 六・四 「三四式無線電信機」の制式化 246

第七章

木村駿吉・外波内藏吉の欧米視察とその成果

——明治三十五年——

.....
285

七・一

海外調査の発令と理由および留守中の委員会

286

七・二 山本英輔の無電訓練と遣英艦隊随行動行

306

第八章

「三六式無線電信機」に向けて懸命な技術開発

——明治三十六年——

.....
325

八・一

新体制と必死の改良研究

326

八・二

正月休み返上の製造と設置

345

八・三

「三六式無線電信機」の電気回路図と取扱説明書

364

第九章

日露開戦／旅順・黄海・ウラジオ艦隊

——明治三十七年——

.....
417

九・一	「三六式無線電信機」を積載して聯合艦隊出撃	418
九・二	旅順口への無電命令と暗号	431
九・三	旅順口での経験による改善	447
九・四	「吉野」の遭難と無電係の戦死 駆逐艦への無電機装備	462
九・五	黄海海戦の概要と無電の活用および無電機の破損	488
九・六	無電望楼と海底ケーブル網	501

第十章 渾身の日本海海戦 無線電信の勝利

十・一	千島列島から台湾南端まで東奔西走の木村駿吉	522
十・二	日本海軍 万全の迎撃態勢	532
十・三	日本海海戦直前の無電機の状況	544
十・四	タタタ・敵艦隊見ユ！ 索敵作戦と「信濃丸」の快挙	562
十・五	「信濃丸」以上の活躍をした「和泉」の決死の觸接航行	589
十・六	旗艦「三笠」 渾身の無線電信	604
十・七	捷報 無電機の損傷と戦後の反省	617
十・八	木村駿吉の栄光と戦後の事柄	640

第十一章 日露戦争後の日本海軍無線

——明治三十九年～大正三年——

………
681

- 十一・一 明治三十九年 第一回国際無線電信会議出席と瞬滅火花放電式の開発 682
- 十一・二 明治四十年 「四〇式無線電信機」と無線電話騒動 700
- 十一・三 明治四十一年 経度測定への無電の応用と水野敏之丞教授からの挑戦状 707
- 十一・四 明治四十二年～四十三年 木村駿吉による「四三式無線電信機」開発と外国製無電機の導入 715
- 十一・五 明治四十四年 木村駿吉の連続波方式への挑戦と清国沿岸調査 726
- 十一・六 明治四十五年／大正元年 無電機開発拠点の東京復帰と「三六式無線電信機」の引退 732
- 十一・七 大正二年 「元年式」および「二年式」の登場と船橋無線電信所の起工 739
- 十一・八 大正三年 木村駿吉の依願免官と特許弁理士登録および執筆活動の再開 745
- 十一・九 明治末年～通信省による商用無電の開始 752

第十二章 海軍免官後の木村駿吉

——大正四年～昭和十三年——

………
757

十二・一	大正四年〜大正末年 特許弁理士と日本無線(株)役員としての木村駿吉	758
十二・二	昭和初年〜昭和十三年 文献紹介／思出談／伝記の執筆／病没	780
十二・三	昭和十四年〜平成二十二年 没後の研究資料	810

謝 辞

.....

図面出典

.....